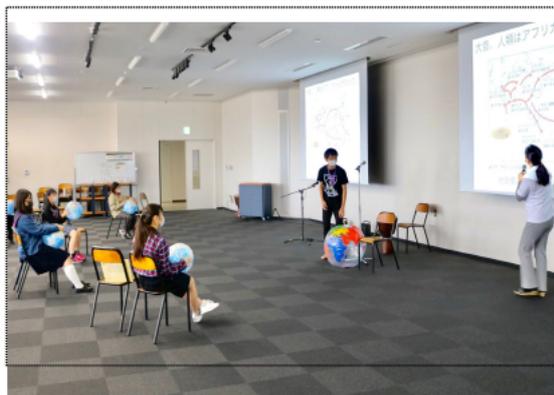


令和2(2020)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)
 実績報告書(プログラム実施報告書)
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)
 (ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号：20HT0089

プログラム名：「人種」はいくつ？地球儀を使った旅と身体表現を通じてヒトの営みを考えよう！



所属 研究 機関	名称	帝京大学
	機関の長 職・氏名	学長・冲永佳史
実施 代表者	部局	教育学部
	職	教授
	氏名	中山京子

開催日	2020年11月7日
実施場所	帝京大学八王子キャンパス
受講対象者	小学校5・6年生
参加者数	2人
交付申請書に記載した募集人数	30名

プログラムの目的

海外だけではなく日本でも文化人類学研究上、「人種」は「社会的構築物であり生物学的に支持されるものではない」とされている。しかし学校教育現場では、生物学的に「人種」が存在しているかのような児童生徒及び教員の認識が修正されることがないままの状況にある。本プログラムの背景にある科研費の研究は文化人類学と教育学をつなぐ学際的研究である。

そこでプログラムでは、科研費研究の中から以下の魅力や面白さを受講生に紹介することを目的とする。

- ①「人種」の研究を通して、人の区分は大勢があると信じれば「ある」と思ってしまう構造に気づくこと、知識を得ると自分の考え方が変わるという学びの魅力を体験すること。
- ②文化人類学という人を観察して解釈する学問と、教育学という人に教えることを考える学問の融合によって、新しい学びのあり方を生み出すことができる魅力があること。
- ③グアムの先住民族チャモロに着目することで人の区分のあり様を理解し、「チャモロダンス」を観察し踊ってみるということを通して人間社会を解釈するという、人の歴史や営みを理解する手法の面白さを体験すること。

プログラムの実施の概要

【受講生にわかりやすく研究成果を伝える工夫】

地球儀の活用:

人種は一つであることやアフリカ起源説を分かりやすい平面図で示すとともに、小学校5年生社会科学習で地球儀の活用が求められていることに合わせ、地球儀にテープを貼ったりペンで描いたりしながら、人類の移動をたどり、イメージを持ちやすくした。(講義1、講義3)

イラストブック活用と読み聞かせの活動:

創生物語を理解するために、日本の神話は絵本を小グループで読み聞かせをし、チャモロの神話は本プログラム実施のために作成したイラストブックを用いて、具体的なイメージを持てるように工夫した。(講義1、ワークショップ2)

ワークショップの導入:

「人の区分」の発生についてわかりやすく伝えるために、似た色の服や髪型など、外見の共通性を見つけて他人同士でも「仲間」とみなし「同族」になるワークショップを取り入れた。(ワークショップ1)

同世代の子どもの写真の使用:

「人の多様性」に関心を持ちわかりやすくするために、同じチャモロのアイデンティティを持ちながらも外見が全く異なるグアムの子どもの写真を多く使用した。(講義3)

ダンス曲の選択:

チャモロがマリアナ諸島に移動してきた頃の物語を描いた曲「トゥレティ」(「旅をする」の意)をワークショップで扱い、人類の移動の歴史や物語に関する知識とダンス表現を一体化させる工夫をした。(ワークショップ2)

「文化人類学と教育学の学際的研究」の意味やなぜ可能だったのかを説明するために代表者自身の歩みや仕事にも触れ、学問の素晴らしさを伝える工夫を試みた。

【受講生が自ら活発に活動し考察するための工夫】

劇場型空間で活動を行う:

参加児童の活発な活動と考察を支えるために、リラックスした雰囲気でありながら知的刺激を保つことができる劇場型の教室「ACTrium(アクトリウム)」を使用した。

知識伝達型ではなく対話型で講義を展開:

代表者は11年間の小学校教諭のキャリアがある。子どもに研究成果と講義の内容について、参加する子どもの発達段階や語彙の理解力に合わせて、付き添いの家族を巻き込みながら対話型のスタイルで深い学びに繋がるように講義を進行する工夫を行った。(講義1、講義2)

参加した子どもに知り合いがいなくても萎縮しないように大学生が補助につき、話しかけながらグループワークを行った。大学生・大学院生は小学校教員免許取得予定者であり、子どもの学びのプロセスを阻害することなく、活動の補助にあたることができた。

知識の活用を促す:

ダンスワークショップに入る前に、チャモロの人類誕生の物語「フウナとプンタン」を理解するようにプログラムし、単なる動きを追うチャモロダンス体験ではなく、あらすじを理解した上で、知識を活用してダンスを体験し、人間の営みに関心を持てるように工夫した。(ワークショップ2、3)

パレオの着用:

太平洋島嶼民の一つの象徴的なアイテムである一枚布(パレオ)を参加者である子どもや活動補助の学生が着用することで、踊ることを楽しむモードへの転換を図ることができ、布を巻くという行為により異文化理解を深め、また空間を構成する仲間意識を持つことができた。チャモロに関連するデザインが施されたパレオを活用し、受講者の活発な思考と活動を促す工夫をした。(ワークショップ2、3)

成果発表場面を用意:

学びを整理し、知識を活用して活発な思考と積極的な表現を促すために、成果発表をゴールとして設定し、参

加者と補助にあたる大学生の温かい共感的な雰囲気の中で発表場面を用意した。

< 当日のスケジュール >

13:30-14:00 受付(帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア1階)

14:00-14:10 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)

14:10-15:00 講義1「人種はいくつ? - DNA 解析の世界と神話の世界-」

14:30-14:50 ワークショップ1「仲間探し-人の区分について考えよう-」

14:50-15:00 講義2「人間を観察する学問-文化人類学ってどんな学問?-」

15:00-15:10 休憩

15:10-15:45 講義3「太平洋にヨーロッパが進出! 小さな島グアムの人びとチャモロに何が起こったのか?」

15:45-16:20 ワークショップ2「踊ってみよう! チャモロの創世物語フウナとプンタンの世界」

16:20-16:30 修了式

< 実施の様子 >

正規の参加申し込みは2名であったが、家族友人他も一緒に参加をし、プログラムは活気が見られた。



< 事務局との協力体制 >

経理、広報、参加者への菓子の手配などは事務局が行い、その他は実施代表者が行った。感染症の広がりにより、随時事務局とは相談をした。

< 広報活動 >

多摩ニュータウン地域のコミュニティ情報紙『もしもし』及び Web サイトに掲載(10月16日)。

< 安全配慮 >

- ・不慮の出来事に備えて、実施協力者(学部学生、大学院生)を配置した。
- ・新型コロナ感染対策として、マスク着用と手指消毒を促し、常に換気に気を配った。
- ・事前に避難経路などの確認を行った。
- ・受講生と実施協力者を短期のレクリエーション保険に加入してもらった。その他の実施者については、大学が加入している保険が適用された。

< 今後の発展性、課題 >

発展性

本プログラム実施によって、「人種」概念を問い直すことが小学生でも可能であることと、時間をかけるべき部分が検証できた。また、実施のために児童図書、地球儀、パレオ(布)などの物品を購入できたので、それらを活用して、小学校及び中学校への移動プログラムとして今後、科研の研究成果を普及することができる準備ができた。まずは、2020年度末に帝京大学小学校3年生の「探求」(全6時間)で、プログラムを発展させた内容で大学と小学校の連携活動として授業を実施する。

課題

新型コロナウイルスの蔓延という事態を申請時には全く想定していなかったこと、採択決定後も感染状況の見通しが立たなかったことから、プログラム実施の可否の目処が立てられなかった。8月に企画をした時は参加応募がなく、11月に企画を立て直した時には、かろうじて2名の参加があった。在籍する学校で感染者が発生したことにより自宅待機が要請され、参加キャンセルもあった。対面にこだわらずテレビ会議システムや配信型でのオンラインプログラムの実施が可能であれば、予定通りに実施することができ、また多くの参加者を得ることができたのではないかと。